

陪審裁判について-2

前回の記事では民事陪審裁判での陪審選考から原告の口頭弁論までを紹介しましたので、今月の記事では被告の口頭弁論、反証、ジュリーインストラクションと呼ばれる陪審への説明、最終弁論、そして陪審の審議から評決が下されるまでを説明したいと思います。

被告の口頭弁論

原告側が口頭弁論を終えた後、原告の申し立てに対するの抗弁として被告も原告と同じように証人と証拠を提示する機会を得ます。被告は被告側の証人や他の証拠を被告の口頭弁論の段階で提供しなければなりません。例えば、被告弁護士は被告側の証人を呼び、直接尋問をします。直接尋問をしている間、弁護士は抗弁に必要な情報と陪審に聞いてほしい情報を引き出す為の質問をします。被告弁護士の直接尋問が終了した後、原告弁護士は被告側の証人に対して反対尋問をする機会を得ます。反対尋問における証拠のルールはやや違っており、尋問は被告側の証人全てが呼ばれ、終了するまで繰り返されます。

被告の口頭弁論が終了した後、原告は被告が提示した証拠に関して反証を挙げる機会を得ます。反証に関する典型的な例として、1月にあった私の陪審裁判を挙げたいと思います。被告の口頭弁論の際、被告側は抗弁の為の証拠を提示し、また、私の日本人の依頼人は嘘をついている、としました。しかし、被告の口頭弁論に対して原告が反証を挙げる際、写真と証言から、被告が嘘をついている事を明確に立証する証拠を提示することに成功しました。それにより、私の依頼人が真実を話していることを陪審に証明する事が出来たばかりではなく、私達は被告が嘘をついている事を陪審に証明する事が出来ました！

ジュリーインストラクション

全ての証拠が提示された後、殆どの裁判所はどのジュリーインストラクションを使うかに関して弁護士と話をします。ジュリーインストラクションに関する裁判所と弁護士の間の話し合いは陪審が休憩に入っている時間に行われますが、それは通常、最終弁論の前に行われます。ジュリーインストラクションとは陪審に法律の説明をする事をいい、事件、証人、証拠に関連し適用される法律についての説明です。近年、カリフォルニア州におけるジュリーインストラクションは法律を陪審にとってより解りやすいものにするために大幅に変更されました。専門的な法律用語を使用する代わりに、普段の生活で使用される言語を用いて法律を説明しています。多くの経験豊かな弁護士はジュリーインストラクションまでに事件をまとめ、また彼らの事件を説明している時からジュリーインストラクションの中で使われている特定の言葉を使用します。これはとても効果的な裁判のテクニックといえるでしょう。

最終弁論

原告が先に最終弁論をします。その後、被告が最終弁論をし、最後に立証責任のある原告が再度、被告の最終弁論に対し反証を挙げる機会を与えられます。

最終弁論は弁護士が事件に関して陪審に論ずる事が出来るチャンスです。なぜなら弁護士はこの段階まで、証人や他の証拠から情報や推論を引き出す事しか許されないからです。最終弁論の間、弁護士は普通、彼らの申し立てを主張したり、事件の事実、法律の使用、その他の説得力のあるテクニックを用いて、陪審を説得しようと試みます。(例えば被告が嘘をついている事を指摘したり、多くの弁護士は誇張した質問をしたり、他の陳述をします。ちょうどO. J. シンプソンの刑事事件でのジョニー・コ克蘭のように、「If the glove doesn't fit, you must acquit!」)

多くの弁護士は最終弁論の際、事件の全てを結合します。例えば、オープニングステートメントの際、証言や証拠により、彼らが何を証明するつもりであるのかを話します。口頭弁論の間、弁護士は彼らのオープニングステートメントを証明する為に必要な証拠と証言を得ようと試みます。そして、最終弁論の際、彼らは「オープニングステートメントの際、私はAとBとCに関して証明するといいました。そして裁判の間、皆さんにAとBとCを証明する証言と証拠が提示されました。ジュリーインストラクションは私達がAとBとCを証明した場合、私達が勝訴する、となっています。この理由から皆さんの評決は私達に賛同するものであるべきです。」など、話をします。

もちろん、実際はもう少し複雑なものですが、これが陪審裁判の基本的な形です。そして弁護士が最終弁論を終了した後、陪審は事件に関して審議するように指示されます。

陪審の評決

陪審は特別な部屋へ通され、彼らは休憩の為の時間のみその部屋から出る事を許されません。この間、他の人間はその部屋へ入る事を許されません。陪審はジュリーインストラクションのコピーを渡され、証言の写しを含む全ての証拠物件も必要に応じて確認する事が出来ます。

次に、陪審は普通、その中から指揮をとる一人の人を選びます。この選ばれた人は陪審長と呼ばれます。その後、陪審は彼らが決定を下すまで、事件について話し合います。この過程に関しての素晴らしい例は、ヘンリー・フォンダ主演映画の「12 angry men」で見ることが出来ます。

陪審が下す決定は、評決と呼ばれます。陪審が評決を下した後、陪審はその旨を裁判所へ知らせます。陪審長は陪審が評決を下した事を裁判所へ知らせ、評決を示す書類を裁判官へ手渡します。裁判官はその書類に目を通し、その後、評決が法廷で読まれます。

陪審の評決が読まれた後、裁判は終了し、弁護士と依頼人は陪審と話をすることを許されます。

裁判の過程は大変な戦略を必要とし、依頼人とその弁護士にとって心理的にも過酷なものです。先の裁判の際、私は夜4時間しか眠らず、残りの時間は常に仕事をしていました。弁

護士とその依頼人が裁判に勝訴する事が出来た時、その時の気持ちは他に例えようがないほど、素晴らしいものです。しかし、逆に敗訴した時は、本当に気分が落ち込みます。しかし、私達の法制度は、ほぼ殆どの場合、裁判所の決定を控訴する事ができます。そのため、いくつかのケースにおいて、2度、3度のチャンスがあります。控訴の過程に関しては来月の記事で説明したいと思います。

(この記事は参考として一般的な概要を皆様にお伝えすることを目的としたものであり、個々のケースに対する法律上のアドバイスではありません。)